

巨峰の側枝性主芽枝の果穂形成に関する研究（要旨）

村西, 三郎
九州大学農学部

上本, 俊平
九州大学農学部

野中, 瑞生
九州大学農学部

<https://doi.org/10.15017/14153>

出版情報：九州大学農学部農場研究資料. 5, pp.63-64, 1980-03. 九州大学農学部附属農場
バージョン：
権利関係：

巨峰の側枝性主芽枝の果穂形成に関する研究（要旨）

* *
村西三郎・上本俊平・野中瑞生

（*農学部園芸学教室）

最近ブドウのハウス栽培が増加し、その技術もしだいに安定化の傾向にある。しかし果樹では一般に年間1作とするため、早められた果実収穫の後に、生育適温期間が非常に長く、以降も連続してハウス栽培をおこなうならば、種類によっては2回目の収穫にも十分な温度管理が可能である。これまでも側枝果穂や結果枝主芽果穂を利用したブドウの2期作試験が報告されているが、著者らは台湾において実用化されている巨峰ブドウの年間2回取りおよび3回取りの栽培技術に興味を抱きその追試を行った。その結果の概要を報告する。

実験方法：実験材料は九州大農場で直径30cm素焼鉢17個にテレキ台の2年生巨峰を栽培し、それぞれ長さ50～60cmの結果母枝を1本作り、それより2本の結果枝を垂直に生長させ、それを12節葉で摘心し、その先端側枝を12～13節葉まで伸長させて、4節葉上でせん定し、主芽を発芽生長させた。さらに、同様な実験を指宿試験地のハウス巨峰（フラン台）において実施した。ここでは主幹より左右に約1mの結果母枝を分岐し、それぞれに結果枝を3～4本ずつ垂直に生長させて、前者と同様な摘心、せん定処理を行なった。また供試結果母枝には栄養生長を抑制して、枝条の成熟を早め、花芽の分化を促進するため、必ず1ないし2果房を着生させた。なお主芽の発芽を誘起させるため素焼鉢区はG_{A3} 100ppm水溶液を側枝の主芽、せん定切口および第4節葉に散布し、指宿区ではBAおよびG_{A3} 100ppmラノリンペーストを主芽に塗布する処理区を設けた。

実験結果：素焼鉢区の強勢な供試樹は結果枝の摘心後、側枝の伸長も良好で、第4節主芽の発芽伸長は無処理の場合でも旺盛で、健全な花穂を持った結果枝に生長した。ところが樹勢が弱く、長大な1番果房を結実させた結果枝においては、側枝の伸長も弱く、主芽は不発芽となり、また発芽伸長しても花穂の貧弱な結果枝となった。側枝主芽の発芽を誘起するためのG_{A3} 処理区では主芽枝が著しく徒長し、葉は奇形となり、花穂も徒長して、花らいは不完全で、開花しても結実せずに消失した。指宿のハウス供試樹はシラス土壌の栽培ではあるが樹勢は一般に強く、結果枝長、側枝長および主芽枝長ともに素焼鉢区のものより長く強勢であった。また主芽枝の果穂形成も良好で、主芽へのBA、G_{A3} 処理の悪影響は見られなかった。生長旺盛な主芽枝ほど開花前に摘心しない場合には花穂の発育が悪く、枯死または着果不良となった。

以上の結果からブドウ巨峰では側枝性主芽枝における果穂の形成は容易であるが、1番果房を肥大成熟させるとともに2番果穂をも十分に発育させる樹勢の調整が必要である。

側枝性主芽枝の果穂形成状態

試 験 区	調査 枝数	結果 枝長	摘心期	側枝長	せん 定期	主 芽 発芽期	主芽 枝長	摘心 葉数	第2番花 開花期	穂 数	
										1 番花	2 番花
露 地 素 焼 鉢 区	無 処 理	6 77.3	4/4 —4/15	cm 26.3	6/28 —6/30	7/5 —7/15	cm 77.5	12.2	7/27 —8/5	1.3	1.2
	無 処 理	10 61.4	4/15 —5/30	17.7	7/12 —7/18	7/19 —8/5	53.6	10.3	—	2.0	0.2
	G A ₃ 処 理	6 65.2	4/10 —4/20	24.3	6/28 —7/5	7/10 —7/14	94.8	11.5	—	1.3	0.0
ハ ウ ス 区 (指宿)	15	85.8	4/11 —4/28	32.6	5/16 —6/18	6/2 —6/21	91.9	10.9	7/5 —7/20	1.7	1.3

園芸学会九州支部大会報告（昭和59年9月）